第3種郵便物認可　北海道建設新聞　2026年(令和8年)8月3日（月曜日）

南幌の路肩拡幅現場に小型チルトローテータ

一二三北路

幅2mでも正対せず法面整形
住宅地での活躍期待

一二三北路（本社・札幌）は、札幌開建発注の337号南幌町南幌路肩拡幅に小型チルトローテータを導入した。西尾レントオールの取り扱い製品で、狭小盛り土の施工効率化・省人化が狙い。バケットを左右45度、360度回転できるため、幅2㍍ほどのスペースでも正対せずに法面整形が可能だ。住宅地の道路、水道、電線共同溝での活躍が期待されている。

正対せずに法面の段切りをする小型チルトローテータ

対象工事は、2025年3月に道央圏連絡道路中樹林道路が開通し、交通量が増えた336号南幌町南16線西から旧夕張川付近までの延長2200㍍の拡幅改良。路体の載荷盛り土9900立方㍍、中庄噴射かくはん工法による地盤改良500本、大型土のう60袋で土留めや仮締め切りを予定している。工期は3月25日から27年1月22日まで。

当初は民地側を借地し、0・4立方㍍級のバックホーで正対して層状転圧と法面整形を施した後に、現状復旧する予定だった。0・2立方㍍級の小型チルトローテータは、借地せずに細部まで施工でき、人力作業を減らすとともに、現状復旧も容易になることから導入を決めた。

運転席の専用コントロールシステム

ベースとなるバックホーは、日立建機のZAXIS40U-5B（0・2立方㍍級、全長5350㍉、全幅1960㍉、全高2530㍉）で、STEELWRIST製の小型チルトローテータ「X06」に、掘削バケットを装着する。

7月下旬から8月末まで使用する予定。監理技術者の松代和行土木部長は「オペレーターも操作にすぐに慣れ、作業ペースは0・4立方㍍のバックホーと同程度を確保できている」と、小型チルトローテータの施工性を評価する。

アタッチメント交換は電動式。運転席側のスイッチで取り付け・取り外しが可能だ。掘削バケットのほか、グレーディングバケットやリッパーなど種類が豊富なことから、1カ月間の稼働状況を踏まえ、今後の利用方法を探る。

国土交通省は25年度から直轄工事で、チルトローテータ付き油圧ショベルの試行を開始。27年度以降に本格利用する見通しで、小規模工事では約5割の稼働時間を削減できると見込む。

西尾レントオールでは、これまで0・7立方㍍級、0・45立方㍍級、0・25立方㍍級のチルトローテータを取り扱っていた。だが、市街地で運用できる小型チルトローテータを求める声があり、4月にICT建機認定を受けたZAXIS40U-5Bと「X06」をラインアップに加えた。

大澤聡西尾レントオール取締役部長は今後は、マシンコントロールやマシンガイダンスとの連携が進む。施工性や品質のさらなる向上が期待できる」と展望する。

東急建設
両側への交互打設不要
耐震スリット「マガラーヌ」

東急建設は、垂直スリット両側への交互打設が不要となる耐震スリット「マガラーヌ」を開発した。垂直スリット材と補強材を一体化して中間支持材で支えることで、耐大な変形やずれなどの施工不良につながる。このため、従来は1㍍から1・5㍍の高さごとに、柱と壁を交互に打ち重ねる必要があった。

マガラーヌは、新構造で打ち分け作業が不要。一般的な階高の柱や雑壁に対しては、コンクリートの側圧が片側から一度に作用するような打設が可能となる。打設管理の効率化や打ち重ね部の不良、コンクリート表面の色むら抑制など品質向上が期待できる。

東京）とクギン（同・名古屋）の取扱商品として販売する。

耐震スリットは、地震発生時に建物の安全性を確保するため、鉄筋コンクリート造りの建築物に

体験型展示で新製品紹介
立川ブラインド工業
ホテルやオフィス向けに

立川ブラインド工業は7月30日、グランドメルキュール札幌大通公園で「タチカワブラインド新作発表会2026」を開いた。「感じる。確かな品質と快適さ」をテーマに、ホテルやオフィス、ショップ向けの新製品を体験型展示で紹介。最新トレンドを反映した製品の魅力を伝えた。

SNSなどで話題になっている調光タテ型ブラインド「エアレ」の両開き仕様を3日から発売する予定。カーテンのように柔らかく美しいデザインや、1枚ずつ独立したスラットの間から通り抜けできる構造を採用し、トレンドのグレー色を加える。

リモコンやスマートフォンで操作できる電動製品「ホームタコス」は、新たにプリーツスクリーンに対応。コンセント式、バッテリー式の2種類から選べる。

オフィス向けの間仕切り「プレイス」には、上吊りの下荷重仕様を追加。床面はキャスターのため下地補強が不要となり、軽量鉄骨の天井下地にも取り付けられる。

このほか、絵や写真を飾れるピクチャーレール、国産木材を使用した「フォレティアエグゼ」などを展示。来場者は、担当者の説明を受けながら手触りや操作性を確かめていた。

今月発売予定の新製品などを展示した

誰もが利用しやすい施設づくりを学ぶ
日本アビリティーズ協会など
バリアフリー化セミナー

特定非営利活動法人日本アビリティーズ協会（本部・東京）とアビリティーズ・ケアネット（同）は7月30日、第二北海道通信ビルでバリアフリー化戦略セミナーを開いた。約45人が参加。バリアフリー化の施工事例のほか、障害者や高齢者が利用しやすい施設づくりを学んだ。

障害者らが利用しやすい施設の在り方を考えた

基調講演で、日本アビリティーズ協会会長などを務める伊東弘泰氏は、障害がある人を受け入れられない社会構造の課題を指摘し、障害者や高齢者が楽しい人生を描けるような生活環境を世の中に広げたい」と伝えた。

セミナーではアビリティーズ・ケアネット一級建築士事務所の末永浩一所長が、車椅子利用者に配慮した住宅改修や店舗のスロープ設置事例を紹介。低コストなバリアフリートイレなど、誰もが住みやすいまちづくりのヒントを発信した。

生コン6月出荷493万㎥減少
全生連調べ 46カ月連続減少

全国生コンクリート工業組合連合会（全生連、斎藤昇一会長）と全国生コンクリート協同組合連合会のまとめによると、2026年6月の生コン出荷実績は前年同月比3・1%減の493万9000立方㍍で、46カ月連続の減少となった。

官公需は6・4%減の134万6000立方㍍で63カ月連続のマイナス、民需は1・8%減の359万4000立方㍍で17カ月連続のマイナスだった。出荷量は前年6月を下回っているものの、稼働日が1日多かったことで、小幅な減少となった。

都道府県の各工業組合の出荷状況を見ると、前年6月実績を上回ったのが15工組で、下回ったのが31工組。このうち、前年同月比で出荷量が10%以上増加したのは7工組、10%以上減少したのは12工組だった。

最も増加幅が大きかったのは石川の23・5%増で、災害復興などが増加につながった。減少幅は宮崎が最も大きい29・3%減となっている。

2～3カ月先の需要動向に関する工業組合への調査では、全体的に見通しを上方修正する傾向が見られた。「前年より増加する」としたのが2工組で前月から1工組増加、「前年並み」が11工組で3工組増加。「前年より減少する」は前月調査から4工組減少し、33工組となった。

6月求人上昇、1.18倍に
電子部品・デバイス製造で増加

厚生労働省が7月31日発表した2026年6月有効求人倍率（季節調整値）は前月比0・01㌽上昇の1・18倍だった。上昇は4カ月ぶり。人工知能（AI）普及に伴う半導体の需要拡大により、新規求人が電子部品・デバイス製造業などで増えた。

有効求人倍率は、全国のハローワークで仕事を探す1人に対し、何人分の求人があるかを示す。有効求職者数は0・1%減少した一方、有効求人数は0・9%増となった。

総務省が同日発表した6月の労働力調査によると、完全失業率（季節調整値）は前月比で横ばいの2・5%だった。完全失業者数は1万人増えた一方、就業者数は36万人減少した。

原数値で見た就業者数は前月と同じ6890万人。比較可能な1953年以降で過去最多という。担当者は「雇用情勢は悪くない」との認識を示した。

自動車大手8社 世界販売3%減
中国で不振続く
26年1～6月

自動車大手8社が7月30日発表した2026年上半期（1～6月）の世界販売台数は、合計で前年同期比2・3%減の1192万台だった。中国など海外での不振が続き、6社がマイナス。トヨタ自動車も2・9%減と、上半期として2年ぶりに前年を割り込んだ。

インドでの成長が大きいスズキは上半期として過去最高を記録し、新型の軽「ムーヴ」が好調なダイハツ工業もプラスだった。

海外販売は3・2%減で、うち7社がマイナス。中国での販売はホンダが34・6%減、トヨタが17・1%減、スズキ、ダイハツ工業、日産自動車

建設トップランナー倶楽部（TRC）
間ありがとうございました
地域建設業の挑戦は続く